

文教委員会 オープン委員会開催記録（概要）

【日 時】 令和6年2月17日（土）午前8時45分から午前10時09分まで

【参加者】 佐伯加寿美 委員長

関 ひろみ 副委員長

佐々木郷美 委員 堀川 友良 委員 中山 淳一 委員

竹腰 連 委員 小柳 嘉文 委員 三神 尊志 委員

金井 康博 委員 神坂 達成 委員 渋谷 佳孝 委員

萩原 章弘 委員

【場 所】 大宮国際中等教育学校 多目的室1

【テーマ】 社会教育が街を変える

【講 師】 埼玉大学教育学部 安藤 聡彦 教授

【発表者】 大宮国際中等教育学校生徒5名

【内 容】

開会后、佐伯加寿美委員長、神坂達成副議長から挨拶の後、講師及び発表者の紹介、講演、事例発表、意見交換へと移る。

講演内容、発表内容及び主な意見交換、講師講評は以下のとおり。

(1) 講演者 埼玉大学教育学部 安藤 聡彦 教授

テーマ 「社会教育の意義 地域課題解決について」

- 「学び」とは何のためにするものなのかということ、自分自身が成功するため自己実現のためなど、自分自身のためのものであるというイメージが強いが、もう一つすごく大事な点として、社会にとっての学びという側面がある。
- 私たちが地域社会で生きていくためには、共通して取り組まなければいけない様々な課題を抱えており、それらの課題のほとんどは個人では解決できないため、組織的・社会的に解決していくことが必要となる。
- 地域の課題の解決について、かつてはコミュニティによって全てなされていたが、現代社会においては、必要な地域課題解決は、自治体や企業、非営利組織が提供するサービスによってなされている。現代人は、自分たちの力でもって社会的な課題を解決

してきたことを忘れてしまい、利用者・消費者としてのみ生活を続けていると、自ら問題を発見し解決する能力を失ってしまうことになる。私たちが今一番考えなければならないことは、地域の課題解決の主体は市民であるべきだということである。

- 一般的な学校での学びとは、やはり知識獲得型の学びになるが、それだけでは様々な課題を解決することは難しい。社会教育法第 20 条の公民館の定義の中で、「实际生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業」とあるが、この实际生活に即する教育というのはすごく大事である。私たちが学校で経験する多くの学び、フォーマル教育ではなく、实际生活に即する教育、状況や対話に基づきながら学んでいくことを決めていくということの意味を、本日この後の生徒さんの発表に即して考えてみてほしい。
- 地域課題解決についての一例として、アメリカ合衆国テネシー州チャタヌーガ市の例が挙げられる。チャタヌーガ市は、人口 20 万人弱の小規模な工業都市だが、1970 年代まで公害問題によりアメリカでもっとも汚い街と言われ、不況も重なり失業者で溢れるような街でもあった。この課題を解決したのが、地元企業によってつくられた財団が展開した都市再生のためのプロジェクトであった。財団は、都市再生のためにどのような街をつくったらよいかという問いを地元のテネシー大学に投げかけたところ、建築学科の学生が水族館を造ることを提案した。この街を流れる大きなテネシー川は、汚い街をきれいにする豊かな資源であり街のシンボルであると考えたのである。この提案は採用され、この川を活かして当時世界最大の淡水魚水族館を造り、併せて周辺部の再開発を行った。この取組は成功を果たし、チャタヌーガ市はアメリカを代表するサステイナブル・シティとして知られるまでになった。なお、プロジェクトには数十億円の費用が掛かったが、市は税金を一切投入せず、全部地元の寄付金によって賄われた。
- もう一つ、さいたま市内に目を向けると、桜区にある大久保東公民館の防災講座の事例が挙げられる。令和元年台風第 19 号の翌年に、大久保東公民館では、この地域に住み続けるために水害対策を学ぶという目的で全 10 回の講座が展開されたが、講座終了後に、この問題を単に学ぶだけではなく自分たちで考え続けようという防災サークルが立ち上がった。このサークルは写真展や親子防災講座などの活動を行い、今年の 2 月には文部科学省の優良公民館表彰を受賞することとなった。これは、それまでごく普通に生活していた住民が、この防災講座を契機として学びに目覚め、その結果として自分たちにもこういうことができるということに目覚めたと言える事例である。
- 皆さんには、学びの意味を、個人のためだけではなく、それが社会に還元されたり、

社会を動かす力となる可能性があるということを、ぜひ考えていただきたい。

(2) 大宮国際中等教育学校生徒による課題解決実践事例の発表

■テーマ1 「さいたま市のオリジナルスイーツを作ろう」

- 社会教育の一般的な定義は、学校や家庭以外の場所で教育を受けることだが、私たちは、社会教育の意義はそこだけにとどまらず、まず「社会から育まれる自分たち」そして「社会を育む自分たち」この2つが総合的に関係し合って新たな効果が生み出されることが社会教育だと考える。
- 2023年「さいたま市立高校生創・さいたまスイーツ応援プロジェクト」に参加。これは、「スイーツのまちさいたま」としての知名度を高めるべく、高校生の考えたスイーツ商品を募集し、選ばれた4チームが「さいたまスイーツビュッフェ」というイベントに実際に商品を出すことができるというさいたま市主催のプロジェクトである。
- 私たちは「BoN」という名前で、盆栽をイメージしたスイーツを作り商品化した。盆栽を選んだ理由は、さいたま市は盆栽のまちとしても有名であり、また、海外からの留学生をホームステイで受け入れたときに、盆栽に興味を持ってきて、海外の人からも人気があると思ったからである。
- 見た目のクオリティとスイーツとしての味にもこだわり、たくさんの試作品の製作と打ち合わせを重ねたことにより、学校では学べない他者との協力を学ぶことができた。また、会議や挨拶といった実社会でのワークスタイルにとっても刺激を受けることができた。
- 今回の活動は、「自分たちが市のPRをする、まちづくりに貢献をする」という面と「実際に社会に出て何かのプロジェクトを行うことで自分たちが形成される」という面において、まさに社会教育の一部であったと考えられる。

■テーマ2 「コミュニティスペースうみねこ」

- 「コミュニティスペースうみねこ」とは、東日本大震災によって、港や畑など働く場所がなくなってしまった方々に働く場所をつくるという目的で設立された、宮城県女川町にある団体である。現在では「ゆめハウス」という施設を運営し、手作りした商品の販売や農作物の栽培など様々な活動を行っている。
- 私たちがこの活動を始めたきっかけは、3年生のときに南三陸や女川町などの宮城

県内の被災地を複数訪れた修学旅行であった。女川町にあるゆめハウスを訪れた際に、コミュニティスペースうみねこの活動を知り興味を持ったことから、連絡を取り始め、この活動が始まった。

- うみねこでは、古着を編んで布草履というスリッパのような商品を製作し販売していた。これには、震災により畑などを流され働く場所を失くした女性たちがこの布草履を作り収入を得ることで地域を活性化させるというねらいがあった。
- 私たちはこの活動に興味を持ち、まず校内で古着の回収を行いうみねこに送付した。うみねこではこの古着を材料として布草履を作ってもらい、再び学校に送っていただいた。届いた布草履は放課後に学校で販売し、売り出した10足は完売。売り上げ金は全てうみねこへ還元した。
- 今後の活動予定としては、3月15日・16日に行われる文化祭にて、新たな商品として「ゆめだま」というキーホルダーやうみねこのコラボ製品を販売予定であり、うみねこの宣伝活動も行っていく予定である。最初7人であったメンバーも現在では12人となり、活動の幅も広がってきている。

■テーマ3 「大宮駅バス乗り場を使いやすくしよう」

- 私たちが通学で使っているバスには課題が山積みである。例えば、9番乗り場がわからない、バスがたまに遅れてしまう、待ち列がわからない、列が前まで詰めていない、バッグを体の前に背負っていない人がいるなどの様々な問題がある。
- 私たちはこれらの課題を解決していくために、このSAを立ち上げた。SAとはService as actionの略で、生徒が地域・学校・社会のための奉仕活動を行う本校の組織である。
- 活動内容としては、①普段の下校時や文化祭などのイベント毎のバス時刻表や校舎案内時に1年生に配る案内パンフレットの作成。これらは通学が楽になるようわかりやすく作成している。②学校説明会時のバス案内の実施。初めて学校を訪れる人には複雑でわかりにくいいため、実際に大宮駅西口の駅前に立ってバス案内を行っている。③大宮光陵高校との下校時刻のシェア。近隣の大宮光陵高校と下校時刻が重なると、バスを1時間待たされることもあるため、事前に連絡を取り合える体制づくりを行っている。
- そして一番大きな活動は、大宮駅西口バス乗り場の改善である。大宮駅西口のバス乗り場は昭和40年頃に作られたもので、混雑状況がひどく、どこに並んでいるのかわからないぐらいの状況が日常茶飯事である。これを改善するため、まずは2021年

12月頃西武バスの営業所に、混雑の状況と課題点、さらに乗り場の変更やロードペイントの実施などの解決策を示した。これらの実施にはさいたま市の許可が必要であることがわかったため、2022年8月にはさいたま市の交通政策課を訪れ、意見交換を行い、同年12月にはロードペイントの具体的な案を提案した。さらに、2023年3月には西武バスを利用する3つの高校で意見交換会を、同年8月にはさいたま市、近隣高校、西武バスとの4者で意見交換会を実施した。

- これらの協議を重ねた結果、ロードペイントの詳細な案が出来上がり、現在はこの案を基に実際に実施していく段階に至っており、今年中にはロードペイントが実現するのではないかと期待をしている。

◎主な意見交換

[三神尊志委員]

ターゲットを定めて、市民のアイデアを尊重し実現してほしいという話があったが、さいたま市の社会づくりにとってどのような方々をターゲットとするのがよいと考えるか。

[発表者]

日本は少子化が進んでいるが、さいたま市は学生が多い街でもあるので、私たちのような学生がターゲットに入ってくると考えられる。また、さいたま市は外国人転入者の増加が多い傾向にあるので、そのような方が暮らしやすいと思えるような取組を考えられるようになったら、色々な人にとって住みやすい街になり良いのではないかと考える。

[竹腰連委員]

次回の文化祭で販売予定である「ゆめだま」とうみねことのコラボ製品のコンセプトについて。

[発表者]

「ゆめだま」のキーホルダーは網目状に球を包む形状になっているが、これは震災で港が流されてしまった女川町の漁師の技術を応用したものである。また、コラボ製品については、コミュニティスペースうみねこの宣伝という目的が強い。

[竹腰連委員]

乗り場変更と理想の待ち列について、今後の取組のビジョンは。

[発表者]

乗り場変更についての一番の課題は、予算の確保や費用対効果であり、今後クラウドファンディングなどで費用を集める方法を考えていきたいと考える。

バスの待ち列については、ロードペイントによって待つべき列が確定されるが、ロードペイントが実施された後にも課題が出てくると思うので、その部分の改善を考えていきたい。

[佐々木郷美委員]

これらの活動を行うにあたってのモチベーションの維持や大変だったことは。

[発表者]

普段の授業から、社会の課題を見つけ出しそれに対する解決を考えるということが、この学校の大きなテーマとなっており、そのような環境が、意欲的に活動するモチベーションになっていると考えられる。

[発表者]

修学旅行でちょっと学んで終わりという形では終わらせたくないという気持ちや、外部の団体と関わって活動を行っていくということがとても貴重な体験になると感じしており、それらがモチベーションに繋がっていると考えられる。

[発表者]

本校のSAは、生徒が自分のやりたい活動を自ら選んで活動しているため、士気が高く、各々が楽しみながら活動を行っていると考えられる。

◎傍聴人からの意見

[傍聴人]

この学校は国際バカロレア教育に基づいており、自分で調べて、協同で作業を行い、人前で話をするという素晴らしい教育方針である。このような教育方針が本校だけでなく、他の学校にも広がっていくことを期待する。

[傍聴人]

生徒の皆さんが各々違う視点で課題を定めており新鮮だった。活動にあたってどれだけ当事者意識を持っているかが、活動の楽しみや活性化につながっていると感じた。

盆栽のオリジナルスイーツのことを自分は知らなかったが、知っていたら是非食べ

てみたかった。もう少しプロモーションをして、広めていただけるといいと思う。うみねこの製品も、もっと保護者へ知ってもらえればお客さんが来ると思う。大宮駅のバス乗り場がそんなにも混んでいるとは知らなかった。費用の面についても、講師の方の講演にもあったように、保護者に寄付を募るなどすれば集まる可能性があるのではないかと感じた。

[傍聴人]

活動メンバーを集めるにあたって、苦勞したことや工夫したことは。

[発表者]

特に苦勞した点は、最初に集まった7人のメンバーのうち、実際に修学旅行で現地に訪れた者は半数しかいなかったことや途中でメンバーが抜けてしまったことである。

◎講師からの講評

[安藤講師]

本日のやり取りの中でも、このような教育環境だから活動ができているという話が出てきたが、この学校の中での社会的な学びの環境を、社会の中でどのように豊かにしていくかという点が、決定的に大事なところだと考えられる。例えば長野市では、このような学びの実践として高校生がどんどん地域に出ていくことによって、市内の社会教育施設やNPOが高校生を受け入れた際のサポート体制づくりを行っている。社会に開かれた学びを、社会の側でもってどのように豊かにしていくかという点を皆で考えて具体化していくことが大事である。

また、このような活動を続けていくのはやはり大変な部分もあるので、その中で結果が出る、相手方が動いてくれるなど、やっていることの意味が分かってくると、それこそがモチベーションに繋がる。学校での学びは点数がついてわかりやすいが、このような学びはなかなか分かりにくいものなので、本日のように皆で確認し合える場というものが大事であると考えられる。

最後に、関ひろみ副委員長から挨拶があり、委員会は終了となる。